

AMERICAN EXPRESS® Sky Traveler
ご入会と
カードご利用で最大合計 **10,000** ポイント

PR [【次世代クラウドサービス開発】カスタムサーバー×OSS導入支援パック](#)

幸せここに 70人の群像 [>>一覧](#)

【47】大栗克俊さん
アイデア次々 光のまち発信 2014/12/21 11:37

いいね! 100 B! 78 チェック g+1 1 ツイート 1

「恋人の聖地」として知られる阿南市富岡町の牛岐城趾公園山頂広場のLEDイルミネーション。青色LEDがノーベル物理学賞に輝いた年だからか。クリスマスシーズンにふさわしいこの光がまた違って見える。



イルミネーションは実に自在で独特だ。音楽に合わせて生き物のように光の色や点灯パターンが変わるからだ。そんなシステムを開発した「光のまち阿南」の先駆者である。

LEDと向き合うようになったのは、阿南青年会議所のメンバーだった2002年冬。衰退しつつある市中心部の立て直しに向けて、地元の日亜化学工業から提供された3万個のLEDをはんだ付けし、牛岐城趾公園を彩った。

当時、LEDイルミネーションは国内初の試み。青い光に心を奪われた来場者に喜びを感じながら、こう直感した。「工夫次第で面白いことになる」



阿南市で生まれ、育った。近畿大時代に電気工学を学び、LEDの光を見て、ものづくりへの思いが高じる。複数のLEDを取り付けた基盤作りや大型オブジェ・・・とアイデアが次々と浮かんだ。

03年冬。牛岐城趾公園や周辺商店街でのイベントに向けて、LED同士をねじで止めて通電する基盤を思いつく。目指すは光の芸術品。コンピューターソフト開発会社を経営しながら、プログラムで光の流れを作るソフトの開発にもこぎ着けた。

そして、頭の中で描いた光のトンネルを青、赤、緑の光を放つ10万個のLEDで完成させた。全長は200メートル。オブジェのデザインは武蔵野美術大の板東孝明教授＝徳島市出身＝に依頼、取り付けには多くの市民ボランティアが参加した。まさに苦心の作だった。

トンネルをくぐると、そこは宇宙空間を飛んでいるような雰囲気。それが受けて15万人がここを訪れた。「LEDを活用した光の芸術を実感できた」



04年夏には取引のあったメーカーなどと共同で50万個のLEDをあしらった3連型のドームを展示する。イベントの盛り上がりは最高潮になり、経営者としての思いも膨らむ。「地場産業としてLEDを活用し阿南を元気にしたい」

LEDに特化した照明開発製造のシナジーテックを創業。05年から毎冬、東京ドームシティ（東京）で開かれているイベントに多種多様なオブジェを出展している。これを目当てに多くの来場者が訪れ、阿南の広告塔にもなっている。

とはいえ、屋外で使われることが多いLEDイルミネーションは試行錯誤の連続だ。持続的に光を放つことが欠かせないため「安全管理はもちろん、配線ミスも許されない」。

クリスマスが巡ってくる。イルミネーションの光に包まれる牛岐城趾公園。その様子に顔が思わずほころぶ。

【写真説明】LEDイルミネーションの下で光のまち阿南の取り組みを振り返る大栗さん＝阿南市富岡町の牛岐城趾公園山頂広場